

目的 最近の世界各国の食品別供給量から、その食事パターンを幾つかに分類し、また二時点間のパターンの変動を考察することにより、食事パターン推移の法則性を見出す。

方法 1960年と1975年の19ヶ国の11種食品別1人1日供給量を資料にし、①各時点における各食品間の相関行列に主成分分析をおこない、第三までの主成分スコアから、グラフに各国を立体的に位置づける。また各食品の第三主成分までの固有ベクトルで各食品をグラフ上に立体的に位置づける。さらに各食品の第一第二因子負荷量で各食品を半径とする円に位置づけて第二主成分までの寄与率を視覚的に直感する。

②二時点を合併して主成分分析をおこない、第二までの主成分スコアで各国の二時点の食事パターンを平面に位置づけ、各国の二時点を結ぶことにより変化の方向をみた。

結果 ①1960年・1975年とすると、砂糖・肉・卵・牛乳・油脂・果実供給量の多い欧米型食パターンと、穀類・野菜・魚中心の日本型と、両者の中間のイタリア型と、いも・豆類が多く野菜・魚の少ないインドネシア型と、穀類が多くいもの少ないインド・パキスタン・韓国型の五つに分類された。②各食品の立体的位置の最も遠いのは、穀類といも類であり、1960年では果実・肉・卵・牛乳・油脂が接近して位置しているが、1975年では穀類といも類以外は、顕著な食品間の類似性あるいは異質性は見出されなかった。

③二時点間では、ほとんどの国が穀類・豆類中心から→野菜・魚介類増加から→肉・卵・牛乳・油脂増加の方向へと、二時点を結ぶ矢印の方向は同じ方向へと向かっている。